

夫婦善哉

——映画文学人生論

原作：織田作之助 (1940年) 「海風」
監督：豊田四郎 (1955年) 脚本：八住利雄
出演：維康柳吉 森繁久弥 撮影：三浦光雄
蝶子 淡島千景 音楽：団伊玖磨
おきん 浪花千栄子
維康筆子 司葉子

おばはん たよりにしてまつせ

織田作之助原作、豊田四郎監督の映画『夫婦善哉』は監督の演出に俳優の息が合った絶妙の芸で観客を酔わせてくれる。

船場の化粧品問屋の若旦那柳吉と曾根崎新地の芸者蝶子——甲斐性なしのダメ男と働き者のしつかり女との組み合わせは森繁久弥と淡島千景。

『駅前旅館』のコンビだが、『駅前旅館』の会話が粹な東京弁、『夫婦善哉』の会話が粹な大阪弁だ。同じ国の言語とはとても思えず、口下手な私にはどちらも真似が出来そうもないが、芸達者の二人は巧みに東京と大阪を使い分けている。

八住利雄の脚本はほぼ原作通り。というのが第一印象だったが、原作を読み直すと、あちこちに大きなズレがあることに気づかされる。

柳吉は女房子供がいる身でありながら蝶子にいれあげ、ついに父親から勘当される。二人が駆け落ちし、熱海で遊んでいるとき、関東大震災に見舞われた。とすると、大正十二年九月一日のはずだが、映画では昭和七年頃の話になっている。

駆け落ちした時の年齢は柳吉三十一歳、蝶子二十歳。それに対して映画撮影時の俳優の年齢は森繁久弥四十二歳、淡島千景三十一歳。二人とも約十歳のサバをよんでいる。

もつとも、映画の時代が昭和七年頃という設定なら二人が駆け落ちして熱海に行ったのは十年前の大正十二年という計算になるから、俳優と劇中



夫婦善哉 ———— 映画文学人生論

人物との年齢差はうまい具合に解消される。しかし、しつかり者の蝶子がヤトナ芸者をやって暮らしを支え、カフェ「蝶柳」を経営するようになるまでに十年の歳月が流れているはずだが、映画からはそんな長い時間の経過は感じられない。

また、原作の柳吉は些（いささ）かどもりで、「どや、なんぞ、う、う、うまいもん食いに行こか」「ど、ど、どや、どや、うまいやろが」のような口の利き方をするが、映画の柳吉は舌の回転がなめらかで、「かめへん、かめへん。ちよろい、ちよろい」と気楽そうだ。「あほやな、わては」と蝶子は何度もこぼすが、そんな蝶子に「おぼはん、たよりにしてまっせ」と柳吉は甘えている。

結末近く、法善寺横丁のシーンでは、雪が降ってくる。「ええがな、おぼはん、二人で濡れていいいな」とまことに調子がいい。

原作の結末では、「蝶子と柳吉はやがて浄瑠璃に凝り出した」となっている。「二ツ井戸天牛書店の二階広間で開かれた素義大会で、柳吉は蝶子の三味線で「太十」を語り、二等賞を貰った。景品の大きな座布団は蝶子が毎日使った」。

天牛書店は昔、店主が貧亡学生からは相場より高く買うことで知られる古本屋だった。私も買ってもらったことがある。残念ながら映画ではその古本屋は撮られていない。

古本を抱えて雪の法善寺